

第 1 2 回

「東京」制したレスリングの猛者

渡 辺 長 武

watanabe osamu

近代オリンピックの創始者は、フランスのピエール・ド・クーベルタンであることはよく知られている。クーベルタンは、知識偏重の青少年教育に疑念を抱き、知育・体育・徳育のバランスのとれた人間形成を目指した。スポーツ活動により教育を改革し、世界平和に貢献したい。そんな構想のもとに、1896年、古代オリンピックにヒントを得て、ギリシャのアテネで第1回オリンピック競技大会が開かれたのである。第1回大会で実施された栄えある8競技のうちの一つがレスリングだ。レスリングは人類最古のスポーツともいわれ、古代オリンピックでも花形種目であったとされる。スポーツ歴史の検証「オリンピックかく語りき」シリーズでは、スポーツ史を飾ったオリンピックをゲストに迎えてきた。このシリーズ最終回で取り上げる競技は、伝統あるレスリングだ。アニマル渡辺こと渡辺長武さんに、壮絶なレスリング人生について伺った。聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

## 東京オリンピックの 開会式で三宅義信さんと 並んで行進

— 1964年10月10日の東京オリンピックの開会式、日本代表選手団の入場行進で、この対談にもご登場いただいた重量挙げの三宅義信さんと並んで、最後列を歩かれていたというのは本当ですか？

本当です。身長の高い順から男女混合で並んでいまして、三宅さんと私の2人は一番しんがりでした。私は160センチで、三宅さんより5センチ高いのですけどね。



東京オリンピック開会式日本選手団入場行進（最後尾2名が渡辺さんと三宅さん）（1964）

— 小さな巨人がともに金メダリストになられたのですね。

三宅さんは日本の金メダル第1号ですからね。

— 10月11日でしたね。

私は、10月14日夜8時、駒沢体育館でした。

— 体操の遠藤幸雄さんと合わせてこの3選手は金メダル確実と言われていました。期待の大きかった女子バレーボールを含め、金メダルがうまく分散するようにスケジューリングされていたそうですね。

私はそう聞いています。

## 父の教え 「何でもいいから1番になれ」

— 北海道のご出身ですね。どんな幼少時代を過ごされましたか。

和寒（わっさむ）というところで生まれました。「わー、さむい」ですよ。旭川の北側、名寄とのちょうど中間ぐらいにある人口1万人足らずの小さな町です。私の「長



旭川市和寒町に生まれる

武（おさむ）」という名前は、「武運長久」を願って父がつけてくれたものです。石材所を営んでいた父は、草相撲で「小車（こぐるま）」という四股名を持っていたほどの力持ちでした。私も小学校、中学校のころは相撲をやっていました。大相撲の吉葉山が巡業で来て体当たりする機会がありました。もう岩にぶつかったような感触でした。

— **すごい当たりだったのでしょうか。お父様の仕事柄、渡辺さんも力自慢でしたか。**

ええ、50キロもする石を運んでいましたから、自然に私の足腰は鍛えられていきました。しかし父は過労からか私が幼いときに倒れました。関節リウマチで寝たきりになって、私には「何でもいから1番になれ」と口癖のように言っていました。そこで私はどうしたと思います？ 毎朝5時に起きて、学校に1番に登校するようにしたのです。人間、やればできるということをご確認くださいね。



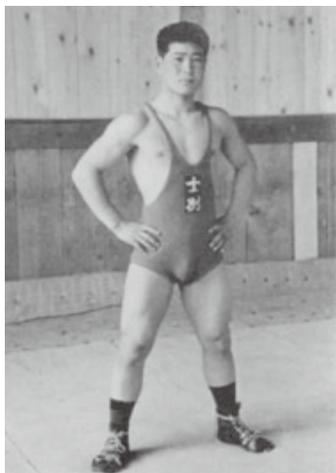
小学5年、町の相撲大会で優勝 (1951)

— **少年ならではの人間哲学ですね。**

父が倒れたあと、母は豆腐屋を始めました。そうすると、石臼で豆をひくのが私の役目になりました。腕力、とくに引く力がこれで身につきました。私の生活そのものが、レスリングに必要な揺さぶり、かけひきの練習になっていたと言えます。

— **環境が渡辺さんをつくりあげていったわけですね。**

## 零下29度の中で レスリングの練習



レスリングを始めた土別高校時代

— **レスリングは土別高校に入学してから？**

はい、相撲取りになりましたが、私は体が小さいのでね。

— **なるほど、相撲には階級がないけれどもレスリングは階級制だから。**

そうです。小さな体でもハンディなしで戦えます。

— **そこに目をつけるところが渡辺さんらしいというか、非凡なのですね。**

零下30度になると高校は休みになるのですが、零下29度であれば、体育館の隅っこにある柔道の畳で練習したものでした。体育館は窓ガラスが破れ、雪が吹き込んで積もる中、裸で練習ですよ。そのころメルボルン・オリンピック(1956年)があって、レスリング(男子フリースタイル73キロ級)で和寒に近い増毛町出身の池田三男さんが金メダルを獲得しました。同じ道産子として憧れたものでした。私は「これだ!」と世界一を夢見るようになりました。

## 高校時代から中央大学の トレーニングメニューをこなす

— **高校では、こわいものなしだったでしょう。**

レスリング部の先生は、中央大学を卒業したばかりの田制秀穂先生でした。レスリングの名門・中央大学の厳しい練習メニューを高校に持ち込んできました。ですから、のちに中央大学に入ってからも全然平気でしたよ。



中央大学合宿所前にて

— **どんな練習でしたか。**

例えば、九十九山(つくもやま)という山に階段があるのですが、そこをウサギ跳びで上っていくのです。

— **ウサギ跳びは今の選手なら、膝に負担がかかるからとやらないでしょう。**

ドクターストップがかかるようですね。でも足腰を鍛えるにはウサギ跳びが一番だと思いますよ。

— それに耐えうる膝をつくっておかなければ。

そういうことです。極端なことを言えば、ウサギ跳びがダメな選手はいりません。

## 大学1年時の ローマオリンピックでは 予選会に出場できず

— 渡辺さんが中央大学の伝統あるレスリング部に入られたのは何年ですか。

1960年のローマオリンピックの年です。

— そのとき、渡辺さんはまだ候補選手ではなかった？

私の男子フリースタイル・フェザー級は、大学の1年先輩の佐藤多美治さんがオリンピック代表でした。(4位)中央大学のレスリング部というのは、1年生は、買い出し、食事当番、飯炊き、風呂で背中を流すなど、先輩の面倒を全部見るようになっていました。そして試合には出られない。だからオリンピックの予選会にも出られませんでした。でも佐藤さんには負けたことはありませんでしたよ。

— 渡辺さんなら、取っ組み合いでも先輩に勝てそうですがね。

いやあ、やはり先輩には逆らえませんよ。「まわし」という練習があってね、10人ほどの先輩が1時間以上、稽古をつけてくれるのですが、ぶっ倒れると水をかけられました。

— ではローマに出られなかった時点で、4年後の東京オリンピックを目標にしたのですね。他にはどんな練習を？



全日本選手権で1960-1964年まで5連覇を果たす(左が渡辺氏)

まず朝練習でロードワーク、皇居を1周です。昼間はとにかくスパーリング。だれとやっても全力で先輩に食らいついていきました。その合間は、重いダンベルでトレーニングです。それから道場の裏が牛天神という神社で、100段ほどの階段がありました。夜中にそこを10往復くらいウサギ跳びをしました。

## スパルタな石井庄八大先輩

中央大学の先輩で、鬼監督(コーチ?)である石井庄八さん(1952年ヘルシンキオリンピック・レスリング男子フリースタイルバンタム級金メダリスト)の指導ぶりは、もうスパルタそのものでした。石井さんは海軍の予科練を経験した方で、門限を破ったら朝まで正座をさせるのですよ。それも外の砂利の上です。でも私はやることをしっかりやりさえすれば、門限は別に破ってもいいではないかというタイプでした。



ヘルシンキオリンピック、フリースタイルバンタム級金メダルの石井庄八(1952)

— 抵抗しましたか。いわゆる反逆児、反逆精神です。

そうです。私は何事も徹底してやるほうですから、門限を破ったなら外で朝まで座禅を組んでいりゃいいのだろうとね。

## 元祖「アニマル」の由来

— “日本レスリング界の父”と呼ばれる八田一朗さん(当時、日本アマチュアレスリング協会会長)の薫陶を受けるようになったのはそのころですか。



東京オリンピックで選手等に胸上げされる八田一朗氏（1964）

そうです。私が初めて全日本選手権で優勝して、学生選手権も取ったのは大学2年のときです。4年のときの世界選手権（1963年）はアメリカでの開催でしたが、八田さんの力添えで全米選手権に特別参加させてもらうことができました。そこで私は6戦全部でフォール勝ち。最短の試合で20秒、トータルでも10分かからなかったでしょう。その強さは、ある意味、もう人間ではない、アニマルだということで、アメリカのマスコミから「ワイルド・アニマル」のニックネームをいただきました。

— アニマルはそういう由来だったのですね。では百獣の王「ライオン」でもよかった。

ははは。当時は嫌でしたが、今となっては最高に素晴らしいニックネームですよ。今は偽物のアニマルがいますけどね。

— アニマル浜口さん、浜口京子選手のお父さんだ。

彼は、私が名付け親ですよ。本名は平吾と言います。八田会長と国際プロレスの創始者で早大レスリング部OBの吉原功さんの2人に、名付けてやってくれと頼まれたのです。

## 「スイス・ウォッチ」のような技の正確さ

続く世界選手権で、もう一つのニックネームをちょうだいしました。当然のように優勝したのですが、私の技は非常に正確でスイス製の時計並みだということで、「スイス・ウォッチ」とも呼ばれました。

— ロレックスでもセイコーでもよさそうですが、当時は正確さを表す代名詞が「スイス・ウォッチ」だったのですね。渡辺さんというところがむしゃらな面が強調されがちですが、実は技の一つひとつを丁寧にかけるところが特徴だということがよくわかる逸話です。では東京オリンピックは、大学を卒業した直後でしょうか。

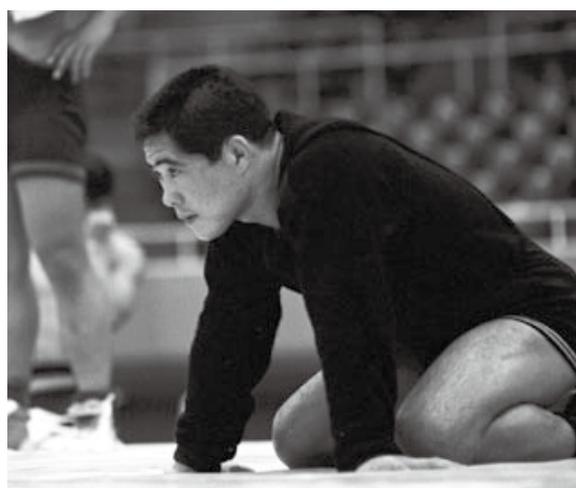
はい。就職も考えましたが、石井庄八先輩が「就職のことは俺に任せて、今はレスリングに専念しろ」と言ってくださったので甘えることにしました。

## 人がやらないことをやるのが「八田イズム」

— 1964年になって、東京オリンピックに向けての強化合宿はそれはもう厳しいものだったそうですね。

八田一朗会長、オリンピック強化コーチの笹原正三オリンピック強化コーチ（1956年メルボルンオリンピック・レスリング男子フリースタイル62キロ級金メダリスト）の体制で、1カ月おきに強化合宿がありました。

— 「八田イズム」にはいろいろな伝説がありますよ。



事前練習（1964）

私が印象に残っているのは、「おまえは負けたら絞首刑だ」と言われました。万が一、金メダルを逃したら、本当にそういう目に遭わされかねない“ど迫力”がありましたね。

— ほう。

それはすなわち「生きているうちにできることをすべてやっておけよ」というふうに、私は受け止めました。その後、「負けは死と思え」を信条としてきました。

— 八田イズムに対するいわば“渡辺イズム”、あるいは“アニマルイズム”ですね。ライオンと睨めっこはやりましたか。

もちろんやりました。いや、それはもうこちらを睨みつけてすごい顔でした。寒中水泳もやりました。

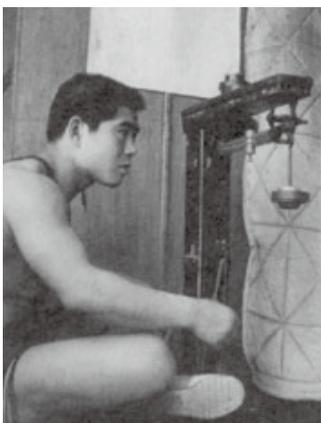
— 「なぜレスリングの選手が寒中水泳を？」と不思議に思ったものでした。

八田イズムというのはね、「人と同じことをやっていたのでは駄目だ、人のやらないことをやれ」というのが真髓なのです。ライオンと睨めっこや寒中水泳という、人がやらないことをやって自信ができましたよ。

## 電気をつけたまま寝る

他に、真夜中に電気をつけたまま寝るというのがありました。

— それはどんな理由ですか。



オリンピック直前、減量との戦い(1964)

海外に行くと、とくに共産圏の国は交通機関がでたらめなことがよくあるのですよ。移動中に、突然、空港で足止めを食らうかもしれない。そんなときは椅子に座ったまま、30分でも40分でも寝られると、体を休めることができる。現に八田さんは軍隊経験者なこともあって、本当にどこでも寝ていましたね。

— それほど、寝ることは大事なのですね。渡辺さんも寝られるようになりましたか。



オリンピック事前合宿(1964)

なりました。海外遠征で常に最高の力を発揮するために、明るいまま寝る訓練は有効でした。笹原さんにも、夜中の3時ごろ回ってきては「起きろー」っとたたき起こされたものでした。

— そして、そのあとすぐに寝なければならないのですね。八田イズムというのは、「ハッターリズム」と揶揄されることがあるくらい、どかーんと景気よくアドバルーンを上げ、選手に厳しさを植え付けていく手法だと受け止めていましたが、その実、かなり合理的なトレーニングなのですね。

はい。私は投げとか一本背負いとか立ち技が得意でしたが、笹原さんは寝技に強かったですからね。自分に足りないそういう面は笹原さんから学ぶことができました。

— 笹原さんには、よく中継で解説をしていただきました。

## ついに訪れた 人生最良の瞬間

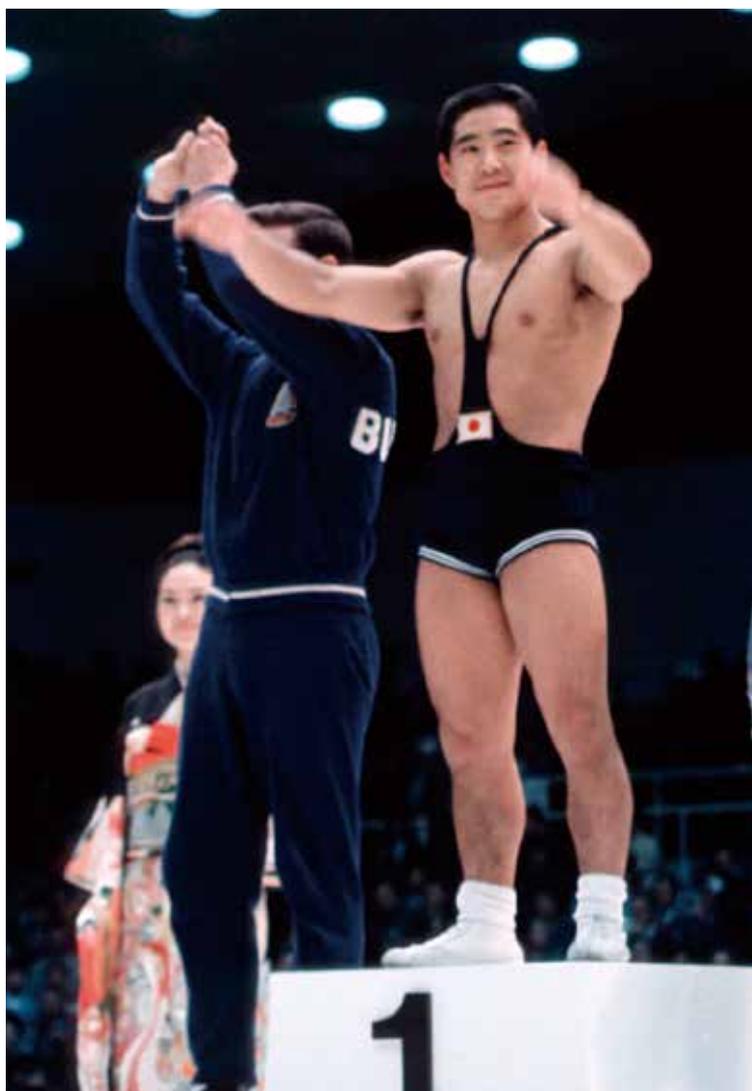
— さあ、東京オリンピックです。金メダルへのプレッシャーを感じたことはありませんでしたか。

ないと言えばウソになりますね。でも私は、勝つことを当然のことだと思っていたのです。自分の生まれ育った環境や、そこまで耐えてきた試練を思い起こしても、レスリング

の試合とは勝つものであると。それが私の哲学であり、負けることは全く念頭にありませんでした。

— 選手村のサウナでマラソンのアベベ・ビキラ選手と一緒にあったとか。

私は試合前、5～6キロの減量があるので、サウナを利用していました。アベベ選手は、ローマオリンピックでは裸足のランナーとして有名になりましたから顔は知っていたのですよ。アベベ選手も減量していたのでしょうか。まさか、そんなところで会えるとは思いませんでした。体はかなり痩せていて華奢に見えましたが、オーラは感じましたね。



東京オリンピックレスリングフリースタイルフェザー級金メダル (1964)

— 10月14日、バンタム級の上武（現姓：小幡）洋次郎選手がまず優勝。続いてフェザー級優勝候補の大本命、渡辺さんが登場し、期待通りに勝利をおさめました。目的を達成して獲得した金メダルは、渡辺さんの人生においてどんな意味を持つのでしょうか。

優勝は人生最良の瞬間でした。いいことも悪いこともありませんでしたが、いま思えば私は一つのことを成し遂げることができたのだと。両親の愛に育まれて生まれてきた私です。地球や宇宙はだれがつくったのだらうと私はよく考えます。そんな中で、私は金メダルによって存在した証（あかし）を遺すことができたわけです。私は本当に幸せ者だと思っています。

## 石井庄八氏の 勧めに従い引退して 電通に入社

— 東京オリンピック期間中に24歳になった渡辺さん。まだ次のメキシコ大会もねえらえると思いましたが、あっさりとした印象があります。ためらいはなかったのでしょうか。

八田会長には、「メキシコにも一緒に行こう。だから自衛隊へ行け」と言われました。私も続ける自信はありましたが、しかし「オリンピックは2度もやる必要はない。終わったら、あとは仕事をしろ」というのが、石井庄八さんの持論でした。石井さんは電通勤務で、私は学生時代、電通でアルバイトをしていました。その石井さんに「自衛隊なんかに行くな。電通に来て仕事をしろ」と言われ、そこで私は11月1日に入社して社会人の第一歩を踏み出し、20年間サラリーマン生活を送りました。

— 自衛隊に進み、メキシコ大会で連覇を果たし、自衛隊の体育学校長になった三宅さんとは対照的な人生の選択をされたのですね。

そうなりますね。石井さんといえば、数々の豪快で奔放なエピソードを持つ方です。もう目を合わせるところか顔もまともに見られないくらいのごい方でした。こわかったですね。当時は日本レスリング協会ではなく、アマチュアレスリング協会という名称でした。レスリングでは飯は食えない。だから石井さんも、レスリングと仕事をはっきり区別していました。



電通時代、石井庄八氏(左)と

— アマチュア時代ゆえの選択といえそうですね。本当に未練はなかったのですか。

まったくないと言えばウソになります。私は打ち込む対象に向けて、とことん命を懸けて取り組むタイプですから。もう一度挑戦すれば、きっと三宅さんや上武洋次郎さんのように、2個目の金メダルを獲得できていたと思います。

## 早朝から夜中まで 仕事、仕事の日々

— 電通ですと、仕事の幅は広がったのでしょうか。

もう毎日、石井さんの訓示を受けながら、夜中まで働いていました。朝7時から早朝会議があるので、6時には出社して全部の拭き掃除を済ませます。

— 「レスリングの渡辺です」とあいさつをするだけで、仕事はやり易くなったのではないですか。



電通恒例の富士登山に参加(左端)

いやいや。私は配属当初、営業局中央部で読売新聞の担当でした。当時はスポーツ選手出身だからといって特別扱いはありませんでしたよ。ほかの新入社員同様、全部をこなしました。レスリングの訓練に耐えた私ですから、1日2〜3時間寝れば平気でした。

— 本当にとことんやる方なのですね。

命懸けですよ。5年ぐらいは本当に毎晩、夜中まで仕事をしていました。1週間の半分以上は、ベッドではなく机の上で寝ていたくらいです。そんな毎日ですから、レスリングのことは一切忘れていました。

## 「健康を取り戻すため」に 一時復帰

— 入社してから6年後の1971年、渡辺さんは復帰して全国社会人選手権に出場されました。



トレーニングを再開(1986)

本格的な現役復帰というわけではありませんでした。仕事漬けが日常になると、タバコは吸う、酒は飲む、睡眠不足、もうめちゃくちゃでした。そこでレスリングの試合という目標があれば、多少節制をせざるを得ないだろうということで試合出場を決めました。ですから表向きは、「健康を取り戻すため」です。でも本音を言えば、ひたすら仕事に励んだ6年間というもの、毎日、試合の夢を見ていました。しかも、試合の中でいつも私は勝っているのです。

— 夢で見たとおり、試合の結果はもちろん勝利ですよ。

はい、現役時代より1階級上のライト級で優勝しました。そして、その後はまた仕事に専念する日々に戻っていきました。

## 再度のカムバック、 公式戦連勝記録は 189連勝でストップ

— 1984年、渡辺さんは20年間勤めた電通を辞められましたね。

はい、事業の独立話が出たのです。しかし諸事情がありまして、もう一度、我に返ると言いますか、原点に戻って人間復活を図りたいと考え、レスリングへの再挑戦を決意しました。46歳のときのことです。1988年のソウルオリンピックの出場を目指し、1年間トレーニングに励みました。助言や応援をしてくれる仲間もいました。全日本社会人選手権大会で、1回戦、2回戦と勝ち進みましたが、今とは異なるルールで、首投げに失敗して判定で1点を取られ、3回戦で敗れました。

— 189連勝まで伸ばしたギネスブックの公式戦連勝記録は、そこで止まったわけですね。無類の強さを誇り、連戦連勝だった渡辺さんは、東京オリンピックで優勝した時点で、公式戦186連勝を記録していたそうです。士別高校から記録がスタートし、大学でもまったく負け知らずだったのですか。

はい、そうです。だって私は、「アニマル」ですから。ソウル大会への挑戦前に病院へ行ったら、頸椎が傷んでいて、「無茶をするとあんたは死ぬよ」と警告されました。「私は死んでもかまいません」という覚悟で臨んだ試合でした。八田イズムである「負けは死」という思想は、もうすでに“アニマル流イズム”になっており、これが私の生き様なのです。

## 世界マスターズ レスリング大会で優勝

— 2003年、62歳で世界マスターズレスリング選手権大会63キロ級に出場し、優勝されましたね。トレーニングは今も続けているのですか。

あるトレーニングジムの名誉会員になっています。ほとんど毎日のように通い、腹筋は500回をこなしていますよ。あ



世界マスターズで優勝（右から二人目）(2003)

あ、そうだ！ 今思いついたのですが、またマスターズ選手権に出ようかな。そういう気持ちになってきた。

— ふーむ。前回の優勝から10年経って、72歳で再び挑戦ですね。

若い世代の選手たちに、この年齢でもやればできるんだということを見せたいと思うのですよ。自ら飛び込んで身を以て示していかないと、説得力は生まれません。

## 大鵬関と同時に 紫綬褒章を受章

— 渡辺さんはときどき、僕らの世界からいなくなることがあるのですよ。今、どうも外国に行っているらしいとか。そういうところが実に渡辺さんらしいといえますか……。



紫綬褒章受章、大鵬ご夫妻と(2004)

アメリカに1年半ほどレスリングの指導に行ったり、バリ島で日本人の息子さんがレスリングを始めた。本物のレスリングを教わるには、指導者も本物がいい。調べたら渡辺がよさそうだということで、呼ばれて行ったりしています。今、彼はインドネシアのチャンピオンになっていますよ。

— 最も日本的な鍛え方をされてこられた感じがするの、現在では外国から声がかかってくる、不思議な人生ですね。

それだけ本物を知っているということだと思いますね。

— 2004年には、紫綬褒章を受章されました。

はい、あれは大きな喜びでした。今年亡くなった大鵬関と同時の受章でした。同じ北海道出身というご縁もありますし、お見舞いにも行きましたけれども、「巨人、大鵬、卵焼き」とも言われた一時代を築いた方と一緒に受章できた。親父の言葉どおり、八田さんの言われたとおり、やってきて良かったなとしみじみ感じました。もういつ死んでも悔いはありませんよ。

## 小原日登美選手の “命懸け”の姿に感動

— ロンドンオリンピックのレスリングでは、女子の活躍が目立ちました。

国民栄誉賞の吉田沙保里選手、伊調馨選手はもちろんですが、とくに小原日登美選手に感動しました。何度も挑戦し、階級を変えた末の金メダル。あれこそまさに「命を懸ける」姿でしたね。



ロンドンオリンピック  
男子フリースタイル  
66kg 級金の米満 (2012)



ロンドンオリンピック  
女子フリースタイル  
55kg 級金の吉田 (2012)

— そして男子も、米満達弘選手がフリースタイル

66キログラム級で、24年ぶりの金メダルを獲得しました。レスリングの今後の強化についてですが、どのようにお考えですか。ウサギ跳びの件を含め、渡辺さんのトレーニング理論に今の選手は果たしてついてきてくれるでしょうか。

2020年の東京オリンピックの招致が成功したら、私は男子レスリング選手に金メダル5個は獲得させたいというプランを持っています。選手自身が「国際大会で金メダルを獲得する」という目標を設定したなら、私はなんとしてもその選手に勝たせてあげたい。説得できるだけのものは持っていますよ。



ロンドンオリンピック  
女子フリースタイル 48kg 級金の小原 (2012)

## “大和魂”を思い起こせ

— 日本選手のトレーニングは、渡辺さんから見ると、まだ生ぬるいですか。

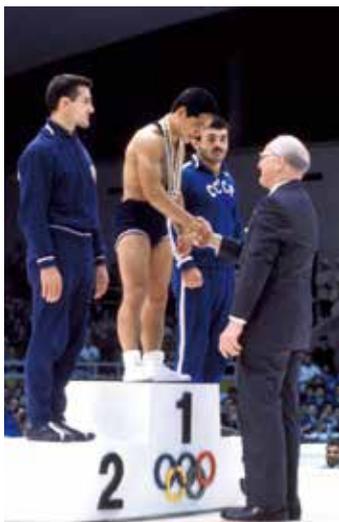
全然、生ぬるいですねえ。負けたあとで、「いやあ、あの国の選手は強かった」。そうではなくて、自分が他国の選手以上の練習をしなければいけないのですよ。レスリングは、一種の戦争ともいえるのですから。日本人は、“大和魂”を忘れつつありますね。ここでもう一度、“大和魂”や“武士道精神”を思い起こすべきです。現在の日本は、政治、経済、スポーツ、いずれにおいてもどん底に近い、多くの国際問題を抱えています。もっともっと日本人は意見の発信をしていかなければ。

— スポーツに限らず、国際関係において日本からの主張が足りないということですね。

そうです。日本という国が今後も在り続けるためには、日本人がスポーツを通してもう一度、“大和魂”を呼び覚まし、継承させていくべきだと思っています。そのためにも、

2020年には東京でオリンピックを開催し、1964年のあ  
のときの情熱を再びみんなに持ってもらいたい!

— いやあ、きょうはスポーツ基本法のことなどもお  
聞きしたかったのですがね。僕はいろいろな方  
からお話を聞きますが、この道ひと筋で生き抜いて  
こられた金メダリ  
ストから、これほ  
どまでに激しい  
愛国心を示す力  
強い言葉を伺っ  
たのは初めてか  
もしれません。



ブランデー・IOC会長から表彰を受ける(1964)

だと思えますよ。海  
外を含めあちこちで  
講演をする機会が  
ありますが、私の話  
を最後まで聞いてく  
ださった方は、みな  
感銘してくれます。

## 信頼を築き “アニマル流イズム”を 浸透させる

— どうすれば今の選手たちはついてきてくれるので  
しょう。

毎日、ひざを交えて徹底的に話し合うことが大切です。昨  
今、柔道をはじめとして体罰の問題が出てきています。指導



北京オリンピックレスリング女子メダリスト等と(左から三人目)(2008)

者側と選手の言い分が食い違っている。それは「心」がつい  
てきていないのですよね。一方的にどついた、殴ったというこ  
とになっていますが、それは信頼関係が足りないからです。

— 例えば女子バレー、東洋の魔女の大松博文監督  
は「鬼の大松」とも言われました。そんな彼に選  
手がついていったのは信頼関係があったからこそ  
ですよね。

ええ、選手の周囲には、指導者のほか、競技の協会があり、  
JOCがあり、医療スタッフがいて、サポートのスタッフもい  
る。その関係に意見のずれがあるということは、コミュニ  
ケーションが足りなかったということになる。練習におい  
て、おそらく一方的な詰め込みと指導方法に陥っていたの  
ではないでしょうか。

— 極端なことを言えば、信頼関係があれば殴られて  
も痛くないということですか。

「愛のむち」という言葉があります。本人がレスリングで世  
界一になりたいのなら、まずは「命を懸ける」覚悟をしな  
いといけませんね。このあたりでもう一度、「八  
田イズム」「アニマル流イズム」を浸透させたいという気  
持ちであります。今でも日本レスリング協会では、年末に  
水戸の大洗で寒中水泳をやっています。現会長であり、国  
際レスリング連盟(FILA)副会長で、JOC副会長でもあ  
る福田富昭さんが継承しています。

## アスリートの セカンドキャリアのために スポーツ庁を

— 選手たちはオリンピックを戦い終えた後の人生、  
セカンドキャリアについていろいろ考えていかな  
ければなりません。渡辺さんご自身の経験と時代  
の変化も踏まえ、何が必要になるとお考えですか。

スポーツ庁を早急につくらなければいけないと思えます  
ね。日本というのは、諸外国に比べてスポーツ行政がと  
ても立ち遅れています。ロシアなどは自分が打ち込んだス  
ポーツで生活をしていくことができました。だからこそ、カ

## 「東京」制したレスリングの猛者 渡辺 長武

レリン（レスリング・グレコローマンスタイル 130キロ級でオリンピック3連覇を果たしたロシアの英雄。“人類最強の男”と言われる）のような偉大な選手が出現するのです。



来日しレスリングを指導するロシアの英雄カレリン

— 日本がオリンピックのメダリストに報奨金を出すようになったのは、1992年のアルベールビル冬季大会からですね。

そのとおりです。遅すぎますし、JOC（日本オリンピック委員会）からの金メダリストへの報奨金は300万円。金額の桁も違うでしょう。スポーツには、「スポーツを通して健全な社会と肉体をつくる」という重要な理念と役割があります。そのためにも、スポーツ庁をつくることです。そうすれば予算も増額できるでしょうし、日本のスポーツ界の健全化を図ることができるでしょう。一生懸命やった人にはそれなりのごほうびを与える環境をつくっていかないと駄目ですよ。トップアスリートが安心して生活していけるシステムを、まずはつくっていくべきではないでしょうか。

— 2020年東京オリンピックの招致の可否が大きなカギを握りますね。

ええ。スポーツで成功をおさめた私は、スポーツ界に恩返しをしていかなければなりません。だから文科省に行って、自ら文科大臣に働きかけをしていきますよ。今度はそこに命を懸けます。

— ぜひ期待しております。どうもありがとうございました。

本対談の直後、IOC理事会において、2020年以後の夏季オリンピック競技大会で実施される中核競技（25競技）から、レスリングが外れるという決定がなされた、というニュースが飛び込んできた。この報道は日本のレスリング界のみならず、世界中のスポーツ関係者に衝撃と混乱を与えている。2020年大会での実施競技残り1枠は、5月のIOC理事会で8競技から3競技程度まで絞り込み、9月のIOC総会で決定される。伝統あるレスリング競技の復活の願いを込めて、推移を見守っていきたい。

## レスリングの歴史

- 1931  
昭和5  
1929年(昭和4年)、早大柔道部がアメリカ遠征しレスリングと遭遇。帰国後、八田一郎らの手によって早大にレスリング部創設
- 1932  
昭和7  
6選手がロサンゼルス五輪に参加するも、上位入賞なし
- 1935  
昭和10  
大日本アマチュアレスリング協会が大日本体育協会に加盟。初めての欧州遠征を実施
- 1936  
昭和11  
ベルリン五輪で風間栄一と水谷光三が入賞を果たす  
**1940** 渡辺長武氏、北海道に生まれる
- 1941  
昭和16  
太平洋戦争突入により、存続が厳しくなる
- 1942  
昭和17  
戦前最後となった全日本選手権が東京・軍人会館で開催
- 1945  
昭和20  
終戦により、早大でレスリング部の活動が再開  
**1945** 第二次世界大戦が終戦  
**1947** 日本国憲法が施行
- 1949  
昭和24  
トルコで行われた国際レスリング連盟 (FILA) の理事会で、復帰加盟が認められた  
**1950** 朝鮮戦争が勃発  
**1951** 安全保障条約を締結
- 1952  
昭和27  
ヘルシンキ五輪で石井庄八があらゆる競技を通じて唯一の金メダル獲得
- 1954  
昭和29  
東京体育館で行われた世界選手権で笹原正三が優勝  
**1955** 日本の高度経済成長の開始
- 1956  
昭和31  
メルボルン五輪で笹原正三と池田三男が優勝
- 1961  
昭和36  
横浜市の慶大記念館で世界選手権が開催され、兼子隆が銅メダル
- 1962  
昭和37  
世界選手権で渡辺長武と市口政光が優勝  
**1962** 渡辺長武氏、アジア大会 (ジャカルタ) で金メダル獲得  
**1962** 渡辺長武氏、世界選手権 (トレド) で金メダル獲得
- 1963  
昭和38  
世界選手権で渡辺長武が2連覇、堀内岩雄も優勝  
**1963** 渡辺長武氏、世界選手権 (ヘルシンボリ) で金メダル獲得
- 1964  
昭和39  
東京五輪で吉田義勝、上武洋次郎、渡辺長武、花原勉、市口政光が優勝  
**1964** 渡辺長武氏、東京五輪で金メダル獲得  
**1964** 渡辺長武氏、全日本レスリング選手権大会で5連覇達成  
**1964** 渡辺長武氏、電通に入社  
**1964** 東海道新幹線が開業
- 1965  
昭和40  
世界選手権で吉田嘉久と福田富昭が優勝
- 1966  
昭和41  
世界選手権で金子正明が優勝
- 1968  
昭和43  
メキシコ五輪で中田茂男、上武洋次郎、金子正明、宗村宗二が優勝
- 1969  
昭和44  
世界選手権で田中忠道と森田武雄が優勝  
**1969** アポロ11号が人類初の月面有人着陸
- 1970  
昭和45  
世界選手権で柳田英明と藤本英男が優勝  
**1970** 渡辺長武氏、全日本社会人選手権で優勝
- 1971  
昭和46  
世界選手権で柳田英明が2連覇を達成
- 1972  
昭和47  
ミュンヘン五輪で加藤喜代美と柳田英明が優勝  
**1973** オイルショックが始まる
- 1974  
昭和49  
世界選手権で高田裕司が優勝
- 1975  
昭和50  
世界選手権で高田裕司2連覇、荒井正雄も優勝
- 1976  
昭和51  
モントリオール五輪で高田裕司と伊藤治一郎が優勝  
**1976** ロッキード事件が表面化
- 1977  
昭和52  
世界選手権で高田裕司が五輪を含めて世界4連覇を達成し、佐々木禎も優勝
- 1978  
昭和53  
世界選手権で、富山英明が優勝  
**1978** 日中平和友好条約を調印

1980 昭和55	モスクワ五輪不参加。12月に群馬でスーパーチャンピオンカップが行われ、富山英明が優勝	2008 平成20	北京五輪で吉田沙保里と伊調馨が2連覇達成。松永共広が銀メダル、湯元健一が銅メダル、伊調千春が銀メダル、浜口京子が銅メダルを獲得
1981 昭和56	世界選手権で朝倉利夫が優勝 <b>1982</b> 東北、上越新幹線が開業	2009 平成21	<b>2008</b> リーマンショックが起こる 世界女子選手権で吉田沙保里と西牧未央が優勝
1983 昭和58	世界選手権で江藤正基が優勝	2010 平成22	世界女子選手権で坂本日登美、吉田沙保里、伊調馨が優勝
1984 昭和59	ロサンゼルス五輪で宮原厚次と富山英明が優勝 <b>1984</b> 香港が中国に返還される	2012 平成24	ロンドン五輪で伊調馨、小原日登美、吉田沙保里、米満達弘が金メダル、松本隆太郎、湯元進一が銅メダルを獲得
1985 昭和60	フランスでの世界初の女子国際大会に大島和子が出場		
1987 昭和62	世界選手権で3選手が銅メダルを獲得		
1988 昭和63	ソウル五輪で小林考至と佐藤満が優勝		
1989 平成元	笹原正二が日本レスリング協会会長へ 世界女子選手権で吉村祥子と清水美弥子が優勝		
1991 平成3	東京で行われた世界選手権で3選手が優勝。10月の男子世界選手権では、32年ぶりにメダルなし		
1992 平成4	バルセロナ五輪で赤石光生が銅メダル獲得 <b>1995</b> 阪神・淡路大震災が発生		
1996 平成8	アトランタ五輪で太田拓弥が銅メダル獲得		
1997 平成9	世界女子選手権で浜口京子が優勝		
2000 平成12	シドニー五輪で永田克彦が銀メダルを獲得		
2003 平成15	福田富昭が日本レスリング協会会長へ 世界女子選手権で浜口京子ら5階級で優勝 <b>2003</b> 渡辺長武氏、マスターズレスリング世界選手権で優勝		
2004 平成16	アテネ五輪で吉田沙保里と伊調馨が優勝。田南部力と井上謙二が銅メダル、伊調千春が銀メダル、浜口京子が銅メダルを獲得 <b>2004</b> 渡辺長武氏、スポーツ振興の分野で紫綬褒章を受章		

## フォトギャラリー



旭川市和寒町に生まれる



小学校5年、町の相撲大会で優勝 (1951)



ヘルシンキオリンピック、フリースタイルバンタム級金メダルの石井庄八 (1952)



ヘルシンキオリンピック、フリースタイルバンタム級金メダルの石井庄八 (1952)



レスリングを始めた土別高校時代



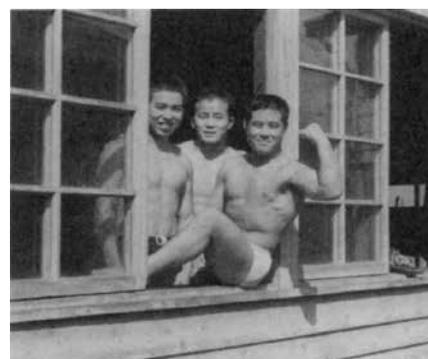
高校2年、北海道大会優勝 (1957)



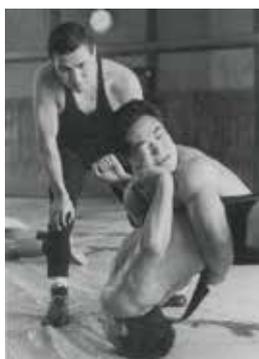
全日本選手権大会で1960-1964年まで5連覇を果たす (左が渡辺氏)



中央大学合宿所前にて



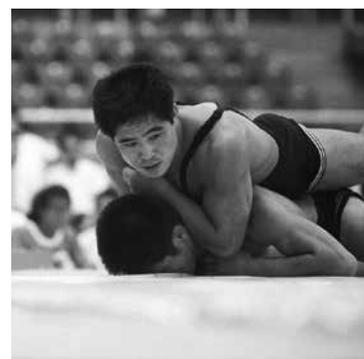
中央大学合宿所にて仲間と



笹原正三コーチと



笹原正三コーチと (1964)



日本選手権兼オリンピック代表選考会 (1964)

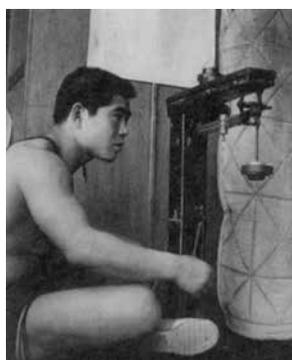
## 「東京」制したレスリングの猛者 渡辺 長武



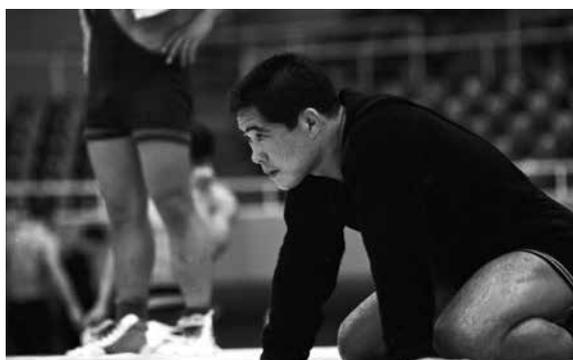
レスリング日本代表チーム (右から二人目)(1964)



オリンピック事前合宿 (1964)



オリンピック直前、減量との戦い (1964)



事前練習 (1964)



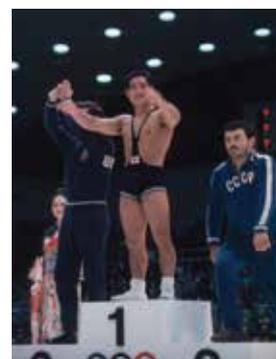
東京オリンピック開会式 (1964)



東京オリンピック開会式日本選手団入場行進  
(最後尾2名が渡辺さんと三宅さん) (1964)



東京オリンピックレスリングフリースタイル  
イルフェザー級金メダル (1964)



東京オリンピックレスリングフリースタイル  
イルフェザー級金メダル (1964)



ブランデーIOC会長から表彰を受ける (1964)



フリースタイルメダリスト (左から二人目) (1964)



電通時代、石井庄八氏 (左) と



金メダルを獲得し胴上げされる (1964)



東京オリンピックで選手等に胴上げされる八田一朗氏 (1964)



電通恒例の富士登山に参加 (左端)



トレーニングを再開 (1986)



トレーニングを再開 (1986)



世界マスターズで優勝 (右から二人目) (2003)



紫綬褒章受章、大鵬ご夫妻と (2004)



北京オリンピックレスリング女子メダリスト等と (左から三人目) (2008)